

第1章 促音に関する研究の背景及び目的

本論文では、日本語の「促音」と発話速度との関係を論ずる。発話の音響分析を通じて、促音を生成面 (production) から検討し、促音の音響的手がかりを明らかにする。

音声の「長さ (持続時間)」は、意味伝達のみならず多様な音声表現を表す重要な要素と言える。日本語における時間情報は、とりわけ重要であり、それについて藤崎・杉藤 (1977) は次のように述べている。

「英語を始め多くの言語では、持続時間は韻律的情報を伝えるが、音韻情報の伝達に果たす役割は副次的なものである。しかし、日本語の場合には、母音や子音の持続時間の延長により音素が加えられたと同様な意味の違いを生じる場合がある。」 (p.82)

日本語における時間単位は、モーラ (拍)¹とされる (神保 1927 ; Bloch 1950 ; 金田一 1967)。まず、音韻論では、日本語におけるモーラ (拍) を、各々のモーラは同じ長さを有すると定義づけている (時枝 1973[1941] ; 橋本 1970[1946] ; 亀井 1956)。一方、音声言語の面でも、日本語のモーラは、「a unit of timing」として時間 (duration) に基づく概念であると言われており (Ladefoged 1982[1975])、フット (foot) や音節と異なり、等時性が重要なポイントとなっている。

また、モーラの音声的特性は、知覚実験を通じて音声の分節単位がモーラであることが言われており (大竹 1990 ; 笥他 1995)、知覚面でも支持されている。次に、生成面では、モーラの等時性を否定する意見 (Beckman 1982) もあるが、肯定する意見の方がより多い (Han 1962a ; Port et al. 1980 ; Homma 1981 ; Sato 1998 など)。

一方、日本語の撥音、長音、促音といった特殊モーラに関しては、日本語非母語話者が最も苦手とする発音であることが指摘されており、また日本語のモーラ等時性を特徴づけるものとして注目されてきた (戸田 1998)。

¹ 本来「拍」とは等時間的なリズム単位であり、「モーラ」は長さを数える単位である。しかし、本論文では、等時間的なリズム単位として「モーラ=拍」と考える (詳細は本論文 2.1 節参照)。上野 (2001) は、日本語・ラテン語・英語それぞれの「モーラ」の同異について、日本語のモーラは音節からほとんど独立し、等時間的な数える単位としての地位を確立しているのに対し、ラテン語のモーラは音節に依存し、音節ごとのモーラ数は1か2に限られる。英語のモーラはさらに音節に依存しており、等時性がないために整数値で数えられるものではなく、軽音節・重音節・超重音節の名称として用いられているに過ぎない、と述べている。

その中でも、子音性の音である促音は、単独では発音できずに、語中にのみ現れる。また、3つの特殊モーラのうち、最も自立性が低いとされている（上野 1984；窪菌 2001[1999]）。

促音に関しては、その音声的特性を明らかにするために、これまで生成及び知覚の両面から多くの研究が行われてきた（Fujisaki, et al. 1973；藤崎・杉藤 1977；渡部・平藤 1985；Sato 1998 など）。

まず、生成面では、(1) 音韻的に非促音と促音の対立があることから、促音と非促音の子音部の持続時間の比率を求めたもの（Han 1962a；Han 1992；Beckman 1982；Sato 1998）、(2) 先行母音対促音の閉鎖持続時間の比を求めたもの（村田・中岡 1990）、(3) 語レベルのモーラタイミングの観点から促音語のモーラ数と語長との関係を調べたもの（Homma 1981）がある。

次に、知覚面では、(4) 無声破裂音の閉鎖持続時間を変数に、促音知覚の判断境界を求めたもの（福居 1978；大坪 1981；西端 1993）、(5) 先行母音対閉鎖持続時間の比率を変数に、促音知覚の判断の境界を求めたもの（藤崎・杉藤 1977；渡部・平藤 1985）がある。

以上の研究結果をまとめると、促音の識別において子音の持続時間を最も重要な手がかりと考えている点では意見が一致しているが、その子音の持続時間を決める基準については意見が分かれている。また、これまでの先行研究では、主にいわゆる日常で自然に話すような発話速度を「普通」の発話速度とし、分析対象を「普通」の発話速度に固定したものがほとんどである。つまり、発話速度の変化と促音との関係を検討した研究は非常に少ない。しかし、日常生活で聞こえてくる発話は、実に多様で、発話速度は実に多様である。そこで、普通の発話速度のみに限定することなく、発話速度を「速い→普通→遅い」の一つの連続体として捉え、先行研究の諸主張を再検証することで、促音に関する新たな知見が生まれる可能性が考えられる。

このように日本語の促音の音声的特徴を明らかにすることで、特殊モーラの根本問題、つまり、日本語における音韻的「長短」の問題に新しい観点を提供できると考えられる。また、日本語非母語話者に対する日本語音声教育への基礎資料として役立つ可能性もある。

本論文の構成及び各章の内容は以下の通りである。

第1章では、研究の背景及び目的について述べる。

第2章では、先行研究の概説を行い、これらの成果と問題点を論じ、その結果に基づいて具体的な研究目的及び研究範囲について述べる。

第3章では、生成実験の詳細を述べ、その結果について分析し、促音の音響的手がかりと発話速度との関係を論じる。

第4章では、実験結果の考察をもとに本論文の研究成果を述べる。

Doctoral thesis (Tokyo University of Foreign Studies)